

TFTプログラムをご担当くださっている皆さまへ

日頃からTABLE FOR TWOプログラム実施のため、多大なるご支援を頂戴しまして誠にありがとうございます。本資料は、かわら版だけでは伝えきれない支援先の情報を皆さまにお届けするための補足資料です。貴団体内でのコミュニケーションやPRにご活用いただければ幸いです。今後とも引き続きのご支援、何卒宜しくお願い致します。

<かわら版 Vol.22をお送りするにあたって>

TFTはフィリピンで、ルソン島西部のカステリヤホス町での給食プログラムと、2013年に台風ハイヤンの被害に遭ったレイテ島での農業プログラムを支援しています。今回のかわら版と補足資料では3年目を迎える給食プログラムの様子をお伝えします。

フィリピンは火山や台風など自然災害に見舞われることが多い国です。カステリヤホス町にも、20世紀最大規模の大噴火となったピナツボ山噴火の被災者再定住地区があります。故郷を離れることになった家庭の子どもたちが、学校で学び、社会に羽ばたくためにも給食は大きな役割を果たしています。

2ページ目以降の資料は掲示板への掲出や、卓上POPとしてご利用いただけます。かわら版本紙、補足資料ともに、TFTのウェブサイト（www.tablefor2.org）からダウンロードしてご利用いただけます。

日本国内での活動状況のお知らせ

<TFTプログラムのご参加団体数>

計 **638社・団体** (2016年3月)

社員食堂や学生食堂以外の形態でのTFTプログラムご参加も増えています。自動販売機や社内カフェの飲料、オフィスへの惣菜デリバリーなど、食堂の設置されていない事業所でも参加できるプログラムを拡充しています。またスーパーやレストランでもTFTプログラム参加商品が増えています。詳細はTABLE FOR TWO事務局までお問い合わせください。

<これまでに寄せられたご寄付> *TFT事務局に入金された寄付金額ベースで食数に換算

累計 **3,898万6,357食分** (2016年2月時点)

東アフリカとアジアの6カ国（ウガンダ、エチオピア、ケニア、タンザニア、ルワンダ、フィリピン）で学校給食の提供と菜園・農業支援を推進しています。

Facebookページで情報発信中

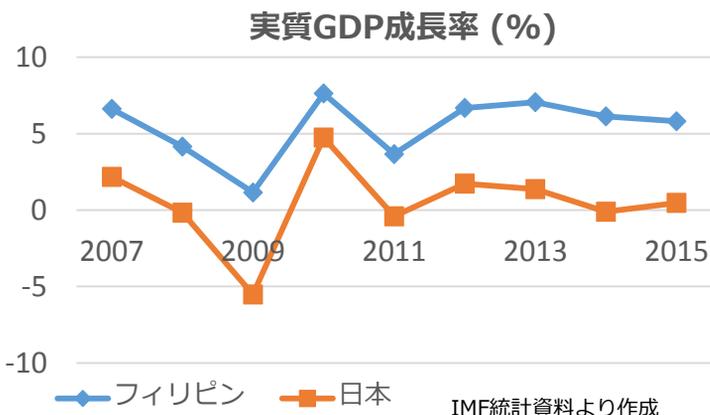


www.facebook.com/tft.jp/

フィリピンは東南アジア諸国の中でも高い成長率を維持しており、製造業だけでなく、サービス業も目覚ましい発展を続けています。年6%以上の実質GDP成長率を実現しているフィリピンですが、世帯あたりの平均実質所得は停滞しています。物価上昇に見合った所得の増加が実現していないこと、そして高い人口増加率などが理由としてあげられます。

政府発表の失業率は6~7%とされていますが、民間調査では約20%という統計もあり、特に都市部での若年層の高い失業率が問題視されています。

フィリピンでは全世帯の約2割が中間・富裕層、残りの8割は低所得層と推定されています。特に低所得層では経済成長の恩恵を享受できていない人たちが多くいます。



改善傾向も残る貧困問題

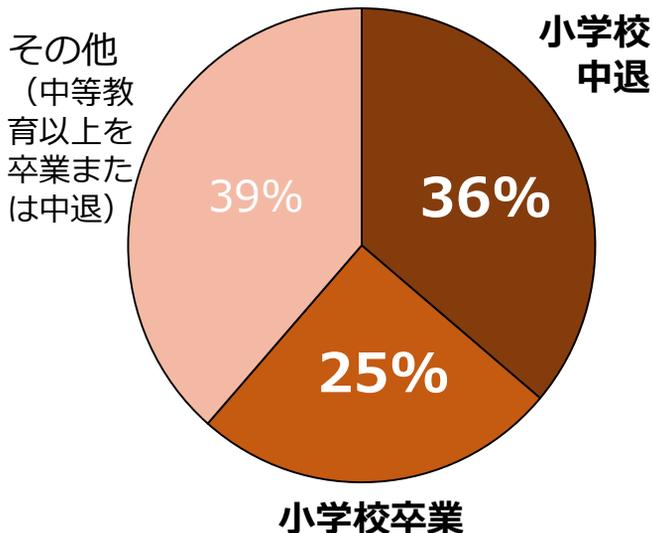
経済成長を続けるフィリピンですが、富裕層と低所得層の所得格差は深刻です。裕福な20%の家庭の収入が全体の約50%を占める一方、貧しい20%の家庭はわずか6%ほどです。この収入格差は1990年代初頭から変わらない傾向です。

世帯ごとの状況を見ると、世帯主の修了した教育と家庭の貧困率には高い相関が見られます。貧困家庭の世帯主の6割以上は、小学校修了あるいはそれ以下の教育しか受けていません。

また、フィリピンの世帯主の3分の1弱は農業を含む第1次産業に従事していますが、その半分ほどは貧困家庭に分類されています。

経済成長を遂げたフィリピンには農村と都市との間で貧富の格差があり、教育は貧困問題の解決に重要な役割を果たしています。

貧困家庭の世帯主が受けた最終教育

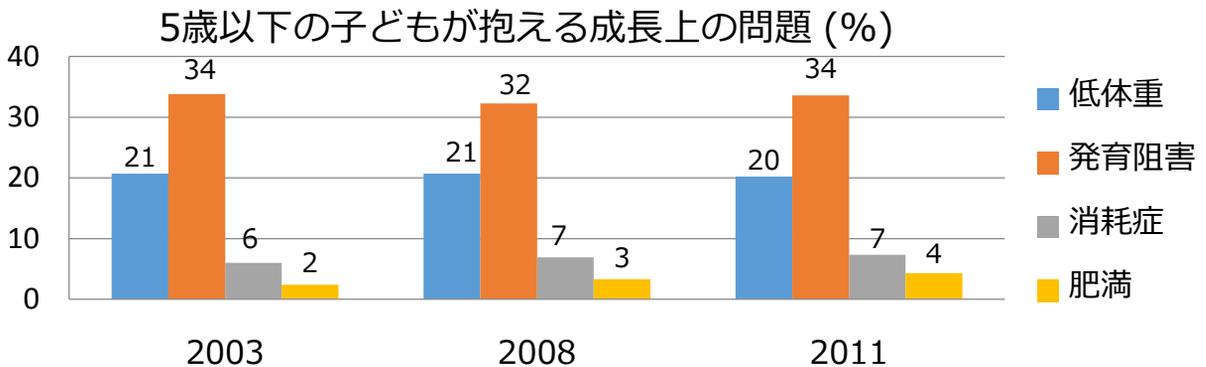


肥満と低栄養

フィリピン社会が抱える二つの課題

他のアジア中所得国と同じくフィリピンも2つの相反する健康問題に直面しています。経済成長により深刻な飢餓は改善されましたが、依然として栄養不足に起因する低体重や消耗症、発育阻害などの問題が残っています。原因としては社会・経済的格差の存在、衛生状態の欠如、食事の質の低さが挙げられます。

発育阻害や消耗症に陥る子どもがいる一方、肥満児も増えつつあります。成人では実に3分の1以上が肥満のフィリピンですが、近年の食生活の変化により糖分・脂肪分を摂り過ぎてしまう人々が出てきたのが理由です。幼少期に低栄養状態だと後に肥満になる確率が増すため、子どもたちがきちんとした食事を取ることが重要です。



バライバイ小学校：発育不良と診断された150人への給食支援

首都マニラからバスを乗り継いで5時間ほどの場所に位置するカステリヤホス町のバライバイ小学校。幼稚園も併設されており、園児から小学校6年生まで、約750名の子ども達が通っています。そのなかで発育不良が著しい生徒150人に給食が提供されています。

フィリピンの主食は日本と同じお米です。一人あたり約0.5合のごはんに肉や魚、野菜を使ったおかず、さらにバナナなどの果物が添えられます。週に数回は卵を使った献立も登場し、栄養バランスのとれた内容になっています。

校内の健康診断では身長に対して標準体重以下の生徒の人数を記録し、健康状態の判断材料にしています。給食プログラム開始後、深刻な低体重の生徒の比率は下がりましたが、中度の低体重の生徒が多くいる状態が続いています。



校内に設置された菜園では、10種類前後の野菜が栽培されており、支援プログラムで給食を食べている生徒たちや、調理担当の親たちが、栽培方法の指導を受けています。カボチャやインゲン豆、ナスに加え、マルンガイという植物の葉も給食の食材として使われています。学校で栽培方法を学んだ母親たちは自宅の庭でも自家用の野菜を育てるようになりました。



バライバイ小学校は敷地面積が限られているため、効率的な栽培が実践されています。土を詰めたプラスチックボトルを棚にかけて、種から苗まで育成したり、ブロックで段差を作って日当たりを改善するなどの取り組みは、家庭菜園にも応用できる技術です。



栄養に関する校内新聞の発行

給食支援を受けている生徒のなかで、校内新聞チームが結成されました。週に1回チームで集まり、バランスのとれた食事の大切さや、菜園での活動の様子を紹介する記事の執筆が進められました。

編集作業はパソコンを順番に使いながら進められ、先生から記事の書き方を指導してもらうなど、生徒たちの学びの機会にもなりました。

完成した校内新聞は7ページにわたる大作で、生徒が描いたイラストや写真、ヘルシーメニューのレシピ、給食プログラムに関する報告などが掲載されました。

